

近年のシュプランガー研究の動向

Die akutulle oder wissenschaftliche Bedeutung der Pädagogik Sprangers? Beitrag zur der seit 1970 relevanten und mythosrevisionierenden Spranger-Forschungen

山 元 有 一
Yuichi Yamamoto

鹿児島女子短期大学

In der Hauptströmungen in Spranger-Forschungen seit 1970 verändert sich allmählich die Denkweise und seit 1980 revisioniert sich die Mythos über SPRANGER, wie SPRANGER als der geistige Vertreter für die Volkslehrerbildung, als der für Gegenwart akutulle Klassiker der Berufsbildung und als der Gegner gegen Nationalsozialismus, etc., in der Schriften Meyer-Willners[1986], Gonons[2002] und Himmelsteins [2013]. Die Gemeinsamkeit, die in diesen uns erkennen läßt, ist die nicht kontekstfreie, weder also texttextexegetische noch werkimmanente Forschungstendenz, die dabei die lebensgeschichtlichen Quellen wie SPRANGER- KÄTHE HATLICH-Briefwechsel voll zur Geltung bringt. Und zwar zeigt z.B. Himmelstein aus geschichtlich-soziale Zusammenhänge, daß das Konzept SPRANGERS die besonder-deutsche Sonderheit, den er für national-konservativ halt, ist. Seine Betrachtungen belehrt, daß Pädagogik SPRANGERS nicht die gewissen allgemeinen Diskussion übernehmen kann. Im diesem Sinne ist es unmöglich, die Denkart SPRANGERS rein theoretisch zu forschen.

Schlüsselwörter/ key words: Spranger-Forschung, Kontekst, Lebensgeschichte, Nichtwerkimmanenz.

キーワード: シュプランガー研究, 非テキスト積義的, 生活史的, 社会史的

我々はこの20年弱の我々自身のシュプランガー研究の道筋を通して、それに一つのまとまりをつけねばならない時期に至っている。そこで我々の論考全体の位置づけを意図して、本稿は取り上げる二次文献を絞って、敢えて研究の動向を大まかに整理する。したがって、ここでは我々は節割りを設ける暇はない。

* * *

エドゥアルト・シュプランガー (Spranger, Eduard/ 1882-1963) に関する論文はかつてほどではないにしても、今でもわが国でもドイツでもいくらか目にすることができる。それにしても、彼に対する興味関心が減少の傾向にあるのは否めない。例えば、彼の二つの主著が辿った経験はそのことを暗示する。1921年の『生の諸形式』(初版1914年, 1921年第2版増補改訂版)は1966年に第9版が公にされた後、さらに版を重ねることはなかった。また、第29版まで版を重ねて大きな成功を収めた1924年の『青年期の心理』についても、1960年代は生き延びるものの、1979年までには出版業における生存権を失っている。大雑把に言えば、1980年代以降、シュプランガーの著作は大学図書館と古書店の世界に完全に撤退し、そのアクチュアリティを失っている。近年でも「事実、……精神科学的教育学のプログラムは、いずれの場合にも今日の(一般的な)教育科学にお

いてほとんど役割を演じていない」(Garz2013, S.13)と、シュプランガー没後50年を契機にしてハイデルベルクで行われたフォーラムの席上でガルツは述べている。既に1970年代のよく知られた教育学的著作にはシュプランガーに全く触れないままのものさえある。例えば、ディートリヒ・ベンナーの『教育科学の諸潮流/ 伝統理論と現代理論の体系』(Benner1973)はその代表格であろう。また1986年に、ハインツ=エルマー・テーノルトは『ツァイトシュリフト・フュア・ペダゴギー』誌の創刊25年に寄せた「教育学の転換」というアーペルを思わせる文章で、研究対象としてのシュプランガーの凋落ぶりを指摘している(Tenorth1986)。この雑誌は少なからず影響力があるが(Tenorth1986, S.75)、テーノルトは1955年から1979年までのこの雑誌における人名索引の引用数の推移を追跡している(ebd., S.51)。その表によれば、1960年代まではシュプランガーを始めとして(引用数1位と2位がそれぞれ4回)、精神科学的教育学の第一世代が1位を独占している(合計12回)が、1970年代以降、ハーバーマス(1位, 2位とも4回)やピアジェ(1位2回)など教育学外部からの人名引用数が増えるとともに、ブランケルツやクラフキなど教育科学者にも世代交代が見られる。それに呼応して、1970年代ではシュプランガーは突然忘れ去られたかのように、引用数第7位以内にすらその名を全く登場させていない。さらに、エヴァ・マッテスが伝えるところでは(Matthes2004), 「……ドイツ教育

協会によって行われた、教育学的に最も重要な20世紀の書籍へのアンケートに際して……リットの『放任か、指導か』（第3位）やノールの『教育学的運動とその理論』（第4位）と異なり、シュプランガーは10位以内にはいなかった。……『生の諸形式』で第15位を、『青年期の心理』で第16位を獲得している。……シュプランガーは100冊の重要な教育学の書籍リストの中では、ただこの2つの心理学的な主要著作でリスト入りしているにすぎない（*ebd.*, S.232）。シュプランガーの著作は、ダウンロードやヴァイスのような、我々が今では耳にすることも少ないリュートの作曲家の作品のようである。

そうした事情は様々な理由から説明できるだろう。何よりヘルマン・ノールの緊密な弟子であり、精神科学的教育学のスポークスマンでもあったエーリヒ・ヴェーニガーが早くも1961年に死去したことであろう（Garz2013, S.18）。また、精神科学的教育学が方法的にも——例えば社会学や批判理論、アメリカ心理学の影響があった——、当時（1960年代）の社会的連関において対応不可能なものと考えられ——しかし、そうした批判は1920年代のアンナ・ジームゼンに既に見られる（*vgl.* Siemsen 1926b, S.19f.）が、彼らの「生（生活）/ das Leben」概念は19世紀後半の社会に、つまり彼らの師であるヴィルヘルム・ディルタイやフリードリヒ・パウルゼンの社会にとどまっている——、教育科学の内部で理論的実践的位置の座を奪われてしまったことは、精神科学的教育学の理論的問題性を露わにしている。1968年のクラフキらの「別れの言葉」が発端、あるいはその現われであろうし（Klafki/ Dahmer1968）、長らく固有の見解表明を躊躇していたハインリヒ・ロートの「現実主義的転回」が引き金となってその教育学の無効性が宣言され、その後の1970年代の「解放教育学」の動きの中でそのまま埋葬されたと言うことも可能であろう。

もちろん、こうした凋落の過程は既に第二次世界大戦直後に既に始まっていた。この運命はシュプランガーの世代にとって皮肉な流れであったろう。というのも、カイザー・ライヒの夕日の時代にディルタイの最後の弟子たちとして社会改革あるいは国家改良の実践的学問として大学において新たに認知され始めた教育学にこそ分け入った精神科学的教育学の第一世代は、1920年代ヴァイマル期の教育による復興という旗印に活躍の舞台を手に入れるが、国家社会主義の時代と第二次世界大戦によって、彼らから二種類の後継世代と別れを告げねばならなかったからである。一方では戦争が戦後の教育学を主導する可能性を期待された世代の命を奪い去った。我々はその事例として『教育過程における実り多き瞬間』を公にしたフリードリヒ・コーパイを挙げることができる（Copei1930; *vgl.* Wehrmann 1982; 山元 2007, 2008, 2010）。また、国家社会主義の敵対

者として命を落としたアードルフ・ライヒヴァインがこれに属する。事実、ガルツはその事情を次のように伝える。「だいたい1910年ごろに生まれた世代が、つまり教育学的パラダイムをさらに進め、さらに発展させることを私たちが期待することのできた、その世代が欠けていることが何よりも挙げられる。ボルノーは『空白』に、また『失われた世代』について語っているが、その世代は『自己展開する可能性を……持たなかった』世代であった（Bollnow 1987, S.26）。この教育学的世代は存在しなかった。いずれの場合にも、数の大きさでも立場の影響力でもそうであった。事実、この世代は1945年までナチス敵対的として対応する生活航路を取って進む道を妨げられたり、1945年以前にナチスシンパ（Natiaffin）であったりして、経歴の続行はできなかった」（Garz2013, S.16）。ここから生じた教育学の、そして社会の窮状から、大戦後にシュプランガーの世代は既にそろそろ引退の時期にありながらも、またボルノーが振り返るように、当時既にシュプランガーらを過去の人物として評価する学生が存在していたにもかかわらず（*vgl.* Bollnow1983, S.33）、前後世代の肩代わりをしてドイツの再々復興のために身を奮い立たせざるを得なかった。その意味で彼はアイロニカルに言えば、「頼らざるを得ない列聖」あるいは「尊敬される時代遅れ」であった。それでも、あるいはそれ故に彼の影響力を生前中に揺がすことはあり得なかった。彼の死後、先に触れたような変化が堰を切ったように現われる。

それにしても、1960年代終わりからの研究状況からして我々には非常に奇異に思われることがある。それは、シュプランガーがその評価を落としていくことが十分に予想されたその時期に、フォルクスヴァーゲン財団の後押しの下で『シュプランガー全集』が、それも主著を通常なら含めてなされるはずの全11巻が、それを意図的に収録しないままに計画され、1969年から刊行開始されたことである。しかもこれは僅か11年で終了する——例えば、『ディルタイ全集』と比較すれば、驚くほど手早い作業であるし、シュプランガーの全集版の後を追うようにして公刊された『ヴィルヘルム・フリットナー全集』（1982-2014年）が主著を含めて出版されたことと比較しても、彼の全集の特異性は認められよう。確かにその後のシュプランガー研究の流れから見れば、研究の対象とされることのなかった彼の初期や晩年の多数の小さな草稿が全集に含まれることとなり、それは大きな貢献をすることになる。とはいえ、初期のものについてはやはり少ないと言わざるを得ず、未公開の資料は別としても、例えば『フッテン書簡』序説（1903年 [N001]）や『倫理的文化』誌の「フマニテート」に関する文章（1904年 [N003]）、『ディ・プロビューレン』誌所収の「想像力」（1904年 [N004]）、『ドイッチュラント』

誌の「美的世界観」に関する文章（1905年 [N009]）など、彼が学生時代に公にした文章は全く収録されていない。唯一彼の学位論文『歴史学の基礎』（1905年 [N005, N006]）は全集で目にするができるが、それもその論文からの一つの章（第7章の「心理学的歴史的類型形成」）のみであり、切り張りであって、補完が必要である（vgl. 山元 2009a, 2009b）。それでもなお我々はシュプランガー研究において、第一次文献とエリザベート・ブロッホマンの著作（Blochmann 1969）を頼りにして探るのが始まりとなるようなヘルマン・ノールについての研究、またはヴォルフガング・クラフキの非常に卓越したリット論（Klafki 1982）を下敷きにして理解を深めることが可能なテオドル・リットの研究よりは有利な状況下にあるだろう。というのも、この両者には全集自体が存在しないからである。ハイラントの辛辣な批判があるにもかかわらず（vgl. Heiland 1988, S.34）、シュプランガーの研究はその刊行で1980年代に第二の出生証明書、あるいは復活証明書を与えられたと言われる状況に入った。

しかし、それだけに我々のような全集完結以後にシュプランガー研究にかつての熱狂から少しばかり冷めた気分で加わった者は、もちろん悪意からではないが、この全集にいわば「落とし穴」があることを感じざるを得なかった。オットー・フリードリヒ・ボルノーやハンス・ヴァルター・ベアー、ルートヴィヒ・エングラート、ヴァルター・アイザーマンなどの全集の編集者たちは、押しなべて教育学関係者であり、しかもシュプランガーの共同研究者や弟子筋にあたる——ここで「弟子筋」という表現を用いるのは、シュプランガーがいわゆる学派というものを形成しなかったとされるからである（vgl. Wehrmann 1982, S.35）。彼らは直接シュプランガーに教えを受け、精神科学的教育学を引き継いでおり、そもそも彼に対して原則としては批判的な立場をとってはいない。例えば、ボルノーは1920年代の始めにシュプランガーの講義を聴講しており、「トゥービンゲン大学において彼の後任となり、彼の最晩年の間、近い関係でいることが許されたのであった」（Bollnow 1977, S. 3-4）。また、ベアーはトゥービンゲンにおけるシュプランガー最初の聴講者の一人であり、彼の晩年に交流を持ち、彼から自らの遺稿の管理を任せられている（vgl. Batz/Schraut 2007, S.15）。したがって、精神科学的教育学がその影響力を急速に失った1960年代に、おそらくはベアーの発案で敢えて全集の刊行に踏み切ったことが、弟子筋によるシュプランガーへの尊敬の念の表れであることは当然であり、彼の生誕100年に照準を合わせた出版完結の願いもあつたのであろう。だが、そこにはもう一つの意図、つまり未公開の文献の公表によってシュプランガー理解の更なる深まりを期待することで、彼らや彼の属する教育学の劣勢状

況を挽回しようとする意図も働いていたのかもしれない。それだけに、全集の編集者の中には過剰なシュプランガー評価、意図的な歪曲の擁護もある。クラウス・ヒンメルシュタインも指摘しているように（vgl. Himmelstein 2013, S.17ff.）、ヘルマン・ヨーゼフ・マイアーは『シュプランガー全集第8巻/ 国家・法・政治』の後書きで、シュプランガーを「社会主義へと進むことはなかったが、……社会民主主義に共感しつつ対峙する民主主義者」としているが（GS8, S. 415）、シュプランガー自身の告白によれば、彼の民主主義へのいわばやむなき転向は第二次世界大戦後であった（vgl. Spranger: Rückblick. in: GS10, S.430; 山元 1999a）。近年でさえ、そうした誤解は存在している（z.B. Mehring 2013, S.66）。

したがって全集完結後の研究の変容は、こうした誤解の払拭に向かっている。例えば、マイアーのような、いわば「上からの」肯定的受容からくる同種の誤解からすれば、ヴァイマル期の初等教員養成施設である教育アカデミーにおけるカール・ハインリヒ・ベッカーとシュプランガーの親和的協力関係も是認されることになるが、これはゲルハルト・マイアー=ヴィルナーが歴史的資料を駆使してその神話性を明らかにし、修正を求めている（Meyer-Willner 1986, vgl. 山元 1999b, 2001a, 2001b, 2003）。とはいえ、両者の対立は教育アカデミーに限ったものではなく、既に1913年のハンブルク植民地研究所等の大学昇格を巡って既に始まっており、その対立は様々な領域で見受けられる（vgl. 山元 2006）。マイアー=ヴィルナーは、主に当時のシュプランガーの側から語るが多く、ベッカーの文章に対照させることが少なかったとしても、彼のような1970年代から80年代にかけてなされたこうした指摘や試みは、シュプランガーの直接の弟子でないというある種都合な理由で、距離を取って彼を考察できる状況が到来したことを示している。したがって、全集の刊行は多彩な文献資料の開示を通してシュプランガー研究をその編集者たちの意図とは別の研究意図において進展させた。例えば、レッフヘルホルツは研究の新しい道筋を次のように示している。「精神科学的教育学の主導的代表者とのドイツの教育科学のこれまでの対決は、全体として慎重な修正として特徴づけることができる。それは……諸定理や諸概念を新たに形成するところにより強く集中している。後者〔定理や概念の形成〕の批判の主要点として考察すべきなのは、経験的研究と検証の欠如、教育的関係や教師についての考え方の中的人格主義、国家の役割の把握における政治的保守主義である」（Löffelholz 1977, S.3/ 補足は筆者による）。マイアー=ヴィルナーもそうした観点から、シュプランガーに取り組んだと考えてもよからう。後述するように、1980年代からのシュプランガー研究は多くのイメージを脱神話化している。

この端境期ではまだ研究者の世代葛藤が見られる。全集の完結後に全集の編者たちの多くは、今度はシュプランガー研究の批判的修正を求めた若手研究者をも加えて、1983年に連邦内務省の印刷助成費を受けてシュプランガー生誕100年を記念する論文集を公にする (Eisermann/ Meyer/ Röhrs1983)。編者はこの論集の重要な課題を「シュプランガーの思考と学問的教育学的後継者の世界理解との間を〈橋渡しすること〉」であるとし (ebd., S.8), そうすることで「シュプランガーの方法や彼の教育科学的心理学的研究成果が時代を越えた意義において認識されること」を望んでいる (ebd., S.9)。したがって、多くの研究者がシュプランガーに対して距離を取り始めた時期にあっても、編者たちは彼の思想の連続性と無時間性をなおも強調していた。とはいうものの、ボルノーは判断を多少留保しつつも、次のように述べて将来的な研究状況を視野に収めているように見える。「シュプランガーが感嘆のまなざしでドイツ教育学の模範的具現者そのものとして眺められ……熱狂的に受け入れられた時代の後、そして学問論的な側面から精密さの欠如と経験的な基礎づけの欠如で彼を叱責し、政治的側面から社会問題、特にマルクス主義に対する理解のなさを指摘した距離化と激しい批判の時代の後、今日になってようやく、ドイツの精神史の内部で彼の人格と彼の態度により正当に考量した判断を下し、哲学と教育学に対する依然として残る彼の意義に辿り着くところに来たようである。おそらく、彼の死後19年後の今日、最終的な裁決に至ることはまだ早すぎるであろう。だが、その課題は我々の目前に控えている」(Bollnow1983, S.15, 強調は筆者)。1980年代直前に、フシュケ=ラインが教育学理論において精神科学的教育学者たちを一枚岩でなく一括した批判のできない多様性として相対化したように (Huschke-Rhein1979, S.401), ボルノー自身にもシュプランガーへの密着から、離反とは言わないまでも距離化や相対化が見られている。

既に萌芽としては1970年代に見られたこうした相対的距離化は、精神科学的教育学者としての、初等教員の精神的支柱や教育アカデミーの精神的父親としての、職業教育の近代的教育理論家としての、そして国家社会主義に断固として抵抗した受苦の人物としてのシュプランガーなどの従来のステレオ・タイプ、言い換えれば「我々の同意を得ずに我々を支配している同じ神話、同じ主題……、自然発生的に体験されている同じイデオロギー」(Arthusser 邦訳, 259頁)を気づかせることとなる。例えば何よりも、既に1971年にフリッツ・ハルトムート・パフラーは初等教育機関へのシュプランガーの関心の発生と展開を、ほぼ全生涯に渡って伝記的歴史的に、彼の理論の内にとどまりつつ考察し、シュプランガー自身が第二次世界大戦後の重要な著作であると明言していることもあって (Spranger1961, S.

20), 『初等教育機関の固有精神』(1955年)や『生まれながらの教育者』(1958年)を研究の軸とする一般的な研究傾向を批判し、パフラー自身が活字化した1918年の意見書「初等教員ゼミナール改革の諸原則」の重要性を先じて指摘していたが (Paffrath1971), マイアー=ヴィルナー(1986年)もその意見書やシュプランガーの大学観から考察の対象となった初等教員養成、やはりパフラーが活字化していた1920年の全国学校会議 (vgl. 山元訳 2004)での初等教員の要求との対決を主にヨハネス・キューネルとの関係で考察して、シュプランガーの初等教員養成の提案が初等教員の側に立つ最善の道と示しつつ、実のところ大学の防衛が主たる目的であったこと、こうした態度が生涯の終わりに至るまで終始一貫していたことを明らかにした。付け加えれば、大学へ初等教育的なもの(教育方法)を導入することに対しても彼は、彼の師であるパウルゼンに依拠しながら盛んに反論した (vgl. 山元 2001a, 2001c)。他方、少々過熱気味で辟易するが、政治教育学講座の開設とアルフレート・ボイムラーの招聘等に反対してベルリン大学を辞任することを公にした1933年の行動とヒトラー暗殺計画に加担した嫌疑でモアビート刑務所に収監された1944年の事実から、通常「シュプランガー=国家社会主義への抵抗者」と図式化され、それ以上の介入的考察がタブー視されていたシュプランガーとナチズムの問題も、1980年前後から研究の対象とされ始め、トーマス・ラウクスティーン (Laugstien1989), 田代 (Tashiro1999), ヒンメルシュタイン (Himmelstein1990, 1994, 1996a, 1996b, 1998, 2000, 2001, 2003, 2004, 2006, 2011), ベンヤミン・オルトマイアー (Ortmeyer2008) などかなり盛況に取り組みされている。本稿では最後の3名のみを取り上げておきたい。田代はシュプランガーがヴァイマル共和国の擁護者であったのか、あるいはヒトラー政権に与したのかと軽率に判断することを控えた上で、彼の保守的思考が同時に反ファシズム性を持ち得たことを示そうとしている。シュプランガーが賛意を示していた単なる個人主義を克服する「自由、義務、自由な奉仕」を伴う「ドイツ的心情」、つまりナショナリズムの健全な国民意識——要するにプロイセン主義——は、階級間の憎悪や不健全な合理主義(実証主義)を止揚するものであったが、ヴァイマル期における諸政党の算術はむしろ反対に内的生活の統一性や共通の郷土や過去の共同体体験の有機的統一的核心を分解し、党派のエゴイズムを助長していたと、シュプランガーには思われていた。したがって、ヴァイマルの議会制民主主義は彼にとって明らかにな健全であったとする。田代はシュプランガーの社会民主党への嫌悪にも似た批判的態度を指摘している。そして、シュプランガーのこうした態度が先鋭化すれば、「国家社会主義な思想世界に類縁性を示すことになる」とし (Tashiro

1999, S.46), シュプランガーの1930年代始めの諸論文にその証拠を見ている。その意味においてシュプランガーは国家社会主義の核心を見通していなかった。しかし、田代はこれに反証の材料を持ち込む。「確実なのは、シュプランガーが自由主義的民主主義的に、つまり反ファシズム的に結びつけられていたということである」(Tashiro1999, S.49)。田代がそこで挙げる証拠物件は1933年の論文「良心の個性と国家」であり、国家社会主義は状況の推移の中で道徳的正義を断念させる絶対的国家と映るようになったとしている。シュプランガーにとって、ヴァイマル期には利害関心を越えた超党派的な形式において教育が課題となっていたために、ナショナリズムの観点から共和国(自由主義的民主主義)は批判されたが、第三帝国の時代には諸人格の道徳的に自立した心情から教育が考えられたために、国家社会主義はやがて遅ればせに疑問視されることになる。プロイセンの共同体主義(シュプランガーの言うところの「社会主義」と国家からの良心の自由という意味での自由主義(「自由, 平等, 博愛」とは異なる「自由, 義務, 自由な奉仕」としての自由主義)という独自に加工された二つの図式の奇妙なアマルガムが、シュプランガーの国家社会主義への類縁と距離、つまり国家社会主義への両義性や曖昧さ(また、田代は指摘していないが、シュプランガーのヴァイマル共和国への距離)を生み出したというのが、田代の結論としてよいであろう。ところで、田代は絶えずシュプランガーの求めた道徳性(正義)が彼の自由主義的精神に由来することを述べるが(z.B. Tashiro1999, S.55)、我々にはこの加工された図式はやはり、カイザー・ヴィルヘルム期のナショナリズム、西側に対するプロイセン・ドイツ的メンタリティにその源泉を持つものであるように思われる。田代は社会主義をシュプランガーがシュペングラー的に変容させたとするが、シュプランガーの自由主義が、我々が一般に用いる意味での自由主義でないほどまでに姿を変えていることは見逃せない。例えば、1939年にウィーンで行われた講演「国民のモラルと人格の道徳性」は、一見したところ当時の体制に迎合した表現を用いているが、彼の言う「新しさ」はナチズムの新しさではなく、今一度刷新されることが望まれたプロイセン精神であると考えられるべきではないだろうか。すなわち、「今日、私たちドイツ人は印象深い事例をどうに探し求める必要はなくなっています。と言いますのも、私たちはそのような偉大な道徳的革命の中にいるからです。……19世紀における原子化した寸断は克服されるべきです。全体に対する新しい責任意識、新しい共通感覚が生じるべきなのです」(Spranger1939, S.259f)。他方で、オルトマイアーについて手短に触れれば、補論として1944年から2007年までのシュプランガーの(我々がわざわざここで研究史を振り返る必要がないほどの)二

次文献の長大な文献報告(S.127-343)を行っている彼の著作(Ortmeyer2008)は、ペーター・ペーターゼンの評価にはつきり見られるように、その白黒は鮮やかである。彼によれば、シュプランガーはナチス体制下で自らの執筆活動を継続し、公的な影響力を行使し続けるために、学術雑誌や新聞記事等で体制にレトリカルに適合した。しばしば指摘される精神科学的教育学へのナチス期の断絶、非連続性を批判するものとして、オルトマイアーの論文は、ある意味では一考に値する(vgl. Kraus2013, S.5)。ところで、これらと比較して読めば、最後に挙げるヒンメルシュタインの数多くの論文はやはり教えるところが多い。それらをまとめて彼は2013年に『ドイツ性という構想/ エドゥアルト・シュプランガーに関する研究』と題して公にしたが、それは「政治的に国家社会主義に近いシュプランガー」(Himmelstein2013, S.20)がヴァイマル議会制民主主義への反対姿勢から国家社会主義体制に順応していった過程を詳細に描き、第二次世界大戦後も「……西側の同盟の勝利者たちによって強制された民主主義化に抵抗しつつ順応しており、『ヨーロッパの中のドイツ』という主導理念の下で新たな優位を獲得しようとした」(ebd., S.32)ことを、つまり政治的には終始一貫して1914年以前のナショナリズムで主張したことを、我々が期待する証明方法で明らかにしている。そこでの主張は、田代のようにシュプランガー擁護的——彼の場合には「止むを得ざる」というのが我々の印象である——でもなければ、オルトマイアーのようにシュプランガー敵対的でもない。シュプランガーは「抵抗者でもなかったし、『内的』亡命者でもなかった。他方で、彼を加害者や同調者のようなカテゴリーに安易に関係づけることもできない」としている(ebd., S.233)。例えば、ベルリン大学の辞表撤回後に、シュプランガーにはチューリヒ大学哲学部招聘の話が持ち上がっていた。結果的にこれは、チューリヒの大学委員会がシュプランガー招聘の法外なほどの実り豊かさを認めながらも、またナチス政府もその文化政策的関心からチューリヒ招聘を承知しながらも——それ故に、やがて文化政策の一環として彼は日本に来ることにもなる——、国家社会主義ドイツへの民主国家スイスの抵抗感とスイスへのドイツ人の招聘への世論の嫌悪感のために——それはドイツ国内においては『新チューリヒ新聞』を発禁にした一方で、スイスは『フェルキッシャー・ベオバハター』誌発禁の対応に出ていることにも表れている(vgl. ebd., S.210)——挫折するが、この経過の中で彼が取った行動の奇妙さをヒンメルシュタインは指摘している。シュプランガーは自らの招聘を「大学から大学への直接招聘」ではなく、「外交的な道で」の実現を期待していた(ebd., S.209)。つまり、彼は「チューリヒへの移転のためにナチス政府の賛同を無条件に維持しようとし、した

がって同時に舞い戻る可能性も開いたままにしようとしていた。詰まるところ、シュプランガーはナチス・ドイツに反対する決意は望まなかった。しかしまた彼は、亡命の道を選ぼうとはしなかった」(ebd., S.211)。彼が招聘問題を国家的水準に移し替えたのは、彼がナチス・ドイツの文化政策の担い手として出向くためでもあった。また、ヒンメルシュタインはシュプランガーが投稿した雑誌の政治的傾向を明らかにして、彼を政治的スペクトルに配置している。シュプランガーがたびたび文章を書いた雑誌は、保守系の『ドイッチェ・ヴィレ』(後続雑誌『クンストヴァルト』)や極右の『全ドイツ新聞 (Deutsche Allgemeine Zeitung)』(1945年4月廃刊——終戦まで刊行されているところに、国家社会主義との関係が見え隠れする)、ナチス週刊新聞『ダス・ライヒ』(1940年創刊, 1945年4月廃刊)(ebd., S.77, 201, 222ff.)などであった。中でも、彼が自らの講演を公にした『ドイツの国民力』誌はオルデンブルク・シュターリンク出版社から出されていたが、それはヨーゼフ・ゲッベルス、ヴェルナー・ボイメルベルクなどが書籍を公刊した、国家社会主義者にとって重要な出版社であった(vgl. ebd., S.225f.)。さらには、1933年10月19日にヒトラー政府が表明した国際連盟脱退の是非を問う国民投票(11月12日)に際して、シュプランガーはその2日前の11月10日に他の大学人に先んじて——というのも、マルティン・ハイデガーなどの他の多くの大学人たちは翌日11日になって態度表明したからである——、『ヴェルテンブルク国家アンツァイガー』誌で賛意を言い表している。「より高い祖国愛の炎」である信仰は国民ばかりでなく、ヒトラー政府をも満たしており、その信仰に由来する「国家への内的奉仕は……その最終的な荘重さをもつばら上から受け取る」のであり、それ故に「国民内閣の呼びかけに名誉心を持ってイエス」と言うこと、外部からの「圧政を拒否」することを求めて、国際連盟脱退への国民の賛同を求めている。その記事の末尾はこうである、「呼吸する空気を……、国境を守るために武装する権利を……、そして我々の名誉と我々の自由を……!……ドイツ(と共に)のみ、世界は回復できるのである!」(oN1933, S.2; vgl. Himmelstein2013, S.222)。その他、パウル・フォン・ヒンデンブルクへの尊敬の念からではあったが、既に1933年1月には彼によるヒトラー首相指名に賛同したり、プロイセン学術アカデミーにおいてヒトラーを「カリスマ的指導者」と呼んだり、ナチスの主導による「ドイツ防衛政策防衛科学協会」の活動に、特別な関心を寄せたりしている点や国家社会主義とも通底するシュプランガーのユダヤ人観などを、ヒンメルシュタインは挙げて、ナチスへの抵抗者という神話を修正している(Himmelstein2013, S.78, 118, 224, 129-150)。なお、既に暗示されているが、シュプランガー研究の動向を踏ま

えると、ヒンメルシュタインの著作は二つの点で教示的であるので、後に別に考察の場を設けたい。

ところで、近年のシュプランガー研究は以上のように多岐に渡るが、こうした研究にさらに大きな進展を期待できるような努力が実を結んでいる。既に全集刊行中の始めに、今しがた触れたパフラーが、初等教育機関の「一括して拒否されたり、批判的な距離をとらずに図式的に単純化されたり、成長してきた歴史的状況に関係づけられないままに叙述されたりする」(Paffrath1971, S.127)研究動向を批判して、綿密な文献研究と生活史的研究の態度を初めて明らかにしたが、そうした提案を助長するように、2001年にはシュプランガーの「学生時代」に関するコブレンツ連邦古文書館の自筆原稿が公にされ、時代状況や思想的社会的布置を背景とした生活史的研究が可能となった(Meyer-Willner 2001)。また、書簡のような、我々日本人が見ても判読できなかった手書きの原稿——そうした資料を駆使したある邦人の著作が存在していることは我々には不思議である——を利用することが、近年までにかなりできるようになっている。例えば、全集版の第7巻書簡集はもちろん、『ケルシェンシュタイナー・シュプランガー往復書簡』(1966年)、『マイネッケ選集』におけるフリードリヒ・マイネッケとの往復書簡(1962年)、『フッセリアーナ』におけるエドムント・フッサールとの往復書簡(1994年)、『ディーム・シュプランガー往復書簡』(1995年)、一部の収録ではあるが『シュプランガー-ケーテ・ハートリヒ往復書簡』(2002年)、そして廃棄されたり消失したりしているためにその数は限られているが、『シュミッティアーナ』におけるカール・シュミットとの往復書簡(2014年, vgl. SSBriefe, S.131)などがある。そして、こうした資料整理の最大の努力がインターネット上における1903年から1960年間のシュプランガーとケーテ・ハートリヒの全書簡の一般公開であることは疑いを入れまいであろう(<http://bbf.difp.de/digitale-bbf/editionen/spranger-hadlich>)。ジルヴィア・マルティンゼンやマルティナ・キルシュタインと共にこの驚くべき献身的尽力に関わってきたヴェルナー・ザッハーは、この書簡の意義を次のように述べている。「ケーテ・ハートリヒ宛の書簡で、シュプランガーは単に人格の日常的なことばかりでなく、同時代の哲学や心理学、教育学と対決し、時代の学問的問題や政治的問題についてはっきりと忌憚なく態度表明をしている(Sacher/Martinsen2002, S.383)。他の箇所でも、「この往復書簡は、シュプランガーの著作や彼の伝記の個別問題、ヴァイマル民主主義や第三帝国に対する態度、19世紀から20世紀への転換期から西ドイツ建国の初期に至るまでのドイツの教育学の内的な編制の発生に対して新しいまなざしを与えてくれるものである。また、この往復書簡はその精神生活を圧倒的に明らかにさせるという点

で、ドイツの時代史の一部をも描き出している」(Sacher 1999, S.247). 例えば、未だ研究の対象となっていないが、シュプランガーのライプツィヒ大学招聘——これに関しては未公開の文章が存在している——を巡っても、この書簡から情報を得ることが可能である。また、ザッハー自身も「教育実践家・学校実践家としての若きシュプランガー」に関する論文の中で、ケーテ・ハートリヒ宛の書簡に見られる様々な逸話を利用して、シュプランガーの教育実践観——方法に対する人格性の優位、過剰に高い理想主義と教育愛、その裏面としての能力や年齢に応じない非現実性と失望、あるいは自己自身の尊大さと女子生徒や他の教員への侮蔑——をまとめ、次のように結論づけている。「彼が専門的な教育的措置や教授の措置を自由に使いこなすことはほとんどなかったばかりか、具体的な教育状況や教授状況においては、まだ強く因習的な伝統の影響下であって、それに従って活動していた。こうしたことはすべて、おそらくはギムナジウム教育の歴史から知られるものである」(Sacher 2001, S.51). この書簡は現在まで、カリン・プリーム (Priem 2000) による女性たちとの交流におけるシュプランガーの学問形成の探求やアルバン・シュラウト (Schraut 2007) による伝記的研究、先に触れたヒンメルシュタインによる神話修正などの際の生活史的社会的確証に寄与している。

このように、このザッハーの期待が示すように、文献上の整備が近年のシュプランガー研究に大きな変化と新しい可能性をもたらしたことは間違いない。既にパフラート、レップフェルホルツ、マイアー＝ヴィルナーと経過した研究の、一方的に理論に偏しない動向は、2001年のテーノルトの論文で、次のように明確に定式化されるに至っている。「現代に対するシュプランガーの意義を確証しようとするようなテキスト釈義的著作内在的考察はあり得ない。彼の理論は歴史的コンテクストにおいて読まれ理解されることが可能であり、アクチュアルなコンテクストにおいては批判的に新たに読まれ、こうして活発に受容されることが可能である」(Tenorth 2001, S.16). つまり、一般教育学的、理論的なシュプランガー研究や受容でなく、先に示したような生活史的考察から彼の思想をより大きな社会的歴史的連関の中に置き入れることへと転換することをテーノルトは求めた。先にシュプランガーと国家社会主義との共犯関係を明らかにしたヒンメルシュタインの著作もこの延長上にある点で、極めて興味深いものである。彼自身もテーノルトに呼応するように、「シュプランガー研究においては、著作に即した精神科学的関心が優位であり、……圧倒的にテキスト内在的でコンテクスト無視的に (kontextsfrei) 叙述されてきた」(Himmelstein 2013, S.243) と述べている。むしろ、歴史的コンテクストや生活史から見れば、シュプ

ランガーの著作等は、純粋な理論的な傾向というよりは、むしろ彼の国民保守的な政治的傾向から形成されたものであり、その傾向から彼はヴァイマルの議会制民主主義を激しく嫌悪し、それを国家社会主義が超克したとして歓迎したのであった。ヒンメルシュタインは、我々がかつて行ったように (vgl. 山元 1999a), この淵源をシュプランガーの成長期 (子ども時代と青年時代) を対象とすることで解明している。例えば、シュプランガーが私生児であって誕生後2年の1884年1月になって法律上認知されたこと (Himmelstein 2013, S.37), 博打好きで浪費家の父親、働く母親との間の一人っ子として孤独に成長したこと (ebd., S.39), 生活を荒廃させ、しかも自らの子どもについて無理解であった父親フランツ——この父親にはエドゥアルト以外に、もう一人婚姻外の娘がいた (vgl. ebd., S.43) ——に対する葛藤と不信の中で成長したこと、しかも父親の出自 (玩具店・商人) がやがて大学人となるシュプランガーにとって不都合であったこと、これらの不確実な要素がシュプランガーの「厳格な自己鍛錬」の習慣 (ebd., S.39) と「自らを高く見せようとしたり、自分自身を極端にエリート的に様式化したり」する傾向 (ebd., S.38) を形成したとし、これが「20世紀の最初の50年におけるドイツ社会の変転する支配諸形式の中での哲学教授への権威主義的国家期待にシュプランガーが順応した」こと (ebd., S.39) の背景をなしたとしている。そしてこれには、シュプランガーがベルリンの都市中央部で生活していたことも作用していたという点で我々の見解とも一致する。具体的には急速な都市化——1871年には約83万人、1882年で110万人以上、1900年ごろで200万人と、ベルリンの居住者は増加している——、同時に急速な工業化——巨大銀行と巨大企業の登場、機械製造と電気工業の中心地 (電気工業は60%以上がベルリンに集中した) ——、それに伴う労働運動の拡大 (ebd., S.44-45), その他、映画の登場——シュプランガーは15歳で初めて映画を見ている——、自動車の認可 (1892年)、地下鉄と高架鉄道の営業開始 (1902年)、最初のバス路線 (1905年)、速やかな電化 (1900年前後) など、シュプランガーの生活も徐々に大きく変わっていったことも指摘され、こうしたことの一切がシュプランガーに内面の空疎さや個人主義の有する危険性、引き裂かれた状態を感じさせ、国民保守の内部に自らを位置づけることになったとしている (ebd., S.46, S.242). さらにこうした彼の傾向に決定的な役割を演じたのが、君主制的ドイツ的な国民感情の醸成 (歴史と政治の神聖化・厳粛な国民教育) を意図したカイザー・メトロポールの構想であった。例えば、パリのブルーヴァール通りに倣ったカイザー・ヴィルヘルム通りの計画、カイザー・ヴィルヘルム一世の記念碑、戦勝ホール (ケーニヒ広場)、ブランデンブルクやプロイセンの32

名の統治者の集合記念碑（ケンパー広場）、この二つの広場を結ぶ戦勝並木道の改造整備、そして何よりも若きシュブランガーに特別な印象を与えたカイザーを先頭とするパレード、軍事的誇示であるパレード、これらは彼にメンタリティの上で「上から下へ向けて生ずる国民的共同体形成」として働いた（ebd., S.47-49）。その証拠をヒンメルシュタインは、我々がかつて Th・レッシングと彼の比較で行ったように（山元 1999a）、馬上のカイザーを揶揄したハインリヒ・マンの小説『恭順な人々』に対するシュブランガーの嫌悪感に求めている——この「くだらない作品はゼミナールに」あり、「自らが二度と自分の家へと持ち込みたくない数少ない書物に属しています」（ebd., S.49/ ES-KH, 11.05.1947）。さらには、1905年12月のケーテ・ハートリヒ宛の書簡も、決定的な証拠になる。というのも、感情以上に、思考においてもこの国民保守的傾向が強調されていたからである。「私は君主制的に考えます。感情からでなく、むしろ私の自然な感情に対して、私が私の追思考に負っている（根拠）からそう考えます」（ebd., S.51/ ES-KH, Dez.1905 [Tagebuch der Sommerreise. 1904, 30.08.1904]）。ヒンメルシュタインのこうした証拠立てを背景とすれば、例えば職業教育論においてシュブランガーが、それまで侮蔑的に見られてきた職業教育を一般教育に組み入れるという、ある種の画期的転換を行ったにもかかわらず、既に現状に見合わなくなっている手工業をモデルとして、それに内的職業としての特性を与え、ケルシェンシュタイナーの職業教育観を理論的に補強したことも理解可能となるだろう（vgl. 山元 2014）。言うまでもなく、両者は共に権威主義的な保守的思考において共鳴しているからである。それ故、彼らの職業教育は、社会の急速な変化に対応して失われつつあった職業的連帯やそこにある共同体意識を復活させ、非エリートである労働者を反社会的にすることなく社会へ組み入れ、階層的に構成させる国民教育の一環であったと考えてよい。したがって、シュブランガーの国民教育は政治教育とほぼ同義であり、それは教養市民層の危機意識の表現でもあった。このようにシュブランガーを考察の対象とする場合には、こうした社会的政治的経済的布置や文化的布置、生活史を踏まえた上でなければ、彼の教育学理論も、その批判的意義さえ失なわれると思われる。その点で、わが国のシュブランガー研究には、彼の思想を純粹に理論的に探究する傾向とその効罪がまだ強く残っていると言えるかもしれない。これにはおそらく、日本のかつての研究者がシュブランガーの一年の日本滞在の研究旅行という強烈な体験をしているだけに、彼に対する「尊敬」にいったん距離を取ることが難しく、それが研究の方向性にも大きく作用してきたのであろう。興味深いことに、日本における戦後シュブランガー研究の第一世代は、シュブランガーの1930年代

半ばの訪日の際に学生であったような世代であった。ちょうどハインリヒ・ロートが精神科学的教育学を長らく批判できなかったように、シュブランガーは現在の日本の教育学者にとってすら詮索されてはならず、むしろ彼の教育学や教育における重要性を常に見出すべき考察対象となっていたようにも思われる。それ故、ドイツでは以前から理論研究の傍らで静かになされ、近年になってその研究価値が認められるようになったコンテキストに常に配慮した方向性——実のところ、例えばドイツならボイムラーやロッホナー、あるいはベンヤミンやアドルノにさえなされるべき方向性——は、今後わが国でもさらに重要となろう。つまり、現象を常に歴史的社会的連関において理解しようとする精神科学的教育学の態度が、精神科学的教育学それ自体に、したがってシュブランガーその人に向けられる時期が到来しているように思われる。これがヒンメルシュタインが我々に教える注目すべき第一点である。

他方、シュブランガーが国民保守的な思考から、国民的集团的同一性の形成のために「ドイツ人の新しい全体性感覚、『ドイツ性』という神話 [つまり、教育理想] を——ユダヤ的なものを締め出しつつ——教育学にとってのキリスト教的ドイツ的主要像として構成し、自らの時代における文化的に『引き裂かれている状態』を克服しようとした」（Himmelstein 2013, S.242, 補足は筆者による）として、ヒンメルシュタインはシュブランガーの教育理論の特殊性を指摘すると同時に、シュブランガーの要求する教育課題に対する言説が、戦前の男性的で力強いドイツ性（文化構成としてのドイツ性）から、戦後の、例えば家族、母性、郷土のような柔らかいドイツ性（文化治癒としてのドイツ性）へと、第二次世界大戦前後でその色調を大きく変えたことも明らかにしている（z.B. ebd., S.122, S.178）——彼は指摘していないが、シュブランガーのベートーヴェンと家庭音楽に関する二つの文章（N038, N698）に目を通せば、ドイツ性の違いはさらに明瞭になる（vgl. 山元 2012, 2013）。第二次世界大戦前では、カイザー・ライヒ末期における国民的なものの分解を、フィヒテやビスマルクの時代のように——この二人はシュブランガーが生涯に渡って尊敬する人物であった——再び国民的統一へともたらすことで解決しようとした。そのために教育学と教育が彼にとっては極めて重要であった（vgl. 山元 2011）。そして、この統一性、ドイツ国民を全体として形成しているものが、「ドイツ的なもの」——シュブランガーにとってはそれは「プロイセン的なもの」に収斂する——、ドイツ性であった（vgl. Himmelstein 2013, S.112-116）。だが、そのために彼はこのドイツ的なものを外部に対してはイギリス的なものやフランス的なもの、内部に対してはユダヤ的なものから線引きし、ドイツ性に属さないものを排除する（ebd., S.135-144）。

何より彼は、個人主義と政党精神に外部の敵対的対象を見ていた (vgl. ebd., S.115). 1916年の講演では既に、個人主義は「何にも自らを組織化されようとしないうこの自由主義」と言い換えられているが、それは「今日でもなおイギリスにおいて強烈に活発です。……私たちの文化は……徹頭徹尾〈組織化された〉文化であり……」(N100, S.17ff., 強調は筆者)と語られ、意図的にイギリスとの差異とドイツの特異性が際立たせられている——なお、この講演は1932年に、つまりヴァイマルの終末期に今一度公にされたという点で象徴的である。また、第一次世界大戦後のヴァイマル共和国は彼の考える敵対物が民主主義として、外部から内部の異分子によって持ち込まれたために、彼が共和国に反対したのはもちろんである。その際、彼はフランス的なものとの差異を強調し、草の根レヴェルの「自由、平等、博愛の要求、ないしは増大する世俗化によって解放された『大量の有毒素』』として非難しつつも、——結果的には実現できなかったことを彼は認めるのだが——ドイツを上からの「国民と国家の国民保守的で権威主義的な構成へと翻訳する」ことを望んでいた (Himmelstein2013, S.284, 二重括弧は1947年の「文化病理学」からのもの。第二次世界大戦後でも民主主義に対する違和感が示されていることになる)。そこで彼は、1789年の革命の特殊な要求である「自由、平等、博愛」を「自由、自己活動、義務」というドイツ的なものへと再コード化しているという (ebd., S.113)。他方、第二次世界大戦後では、もはや戦前に主張された構成的ファウスト的ドイツ性によってもはや再興できないほどに国民の「心」が精神的瓦礫と化してしまったために、シュプランガーはそのドイツ性を深いところで支える癒しとしての女性的ドイツ性 (住まいという聖域)、平たく言えばファウストの「女」——プリームがシュプランガーの学問形成の基盤としたもの——を前景に出すようになったが、これを通して彼がドイツ性を放棄したというわけでは

なかった。このようにシュプランガーが特殊的ドイツ的な教育理想に一貫して固執していたことを確認したのがヒンメルシュタインであり、これが彼からの第二の教示であるが (z.B. Himmelstein2013, S.286), それに従うならば、特殊ドイツ的な教育学が果たして、少なくとも公教育における政治的宗教的中立性を求めるわが国において一般的研究の意義を有するのか、むしろ彼の教育学は——もしそれが存在するとして——歴史的一事例、しかもある種の変則事例 (Anomalie) として取り扱うべきではないのかという疑問が浮上する。事実、彼は一般教育学的なものを残してはおらず、僅かに1930年代に概略的に (N352), そして第二次世界大戦後にトゥービンゲンでの講義という形式で (o.N1948) それを伝えているにすぎない。

* * *

シュプランガー研究史から根本的に抽出される重要な一般的問いは、学問における我々の関心では教育学における価値中立の問題であろう。シュプランガー研究においては、あまねく通用する教育学的意義のために彼の理論的妥当性が常に求められてきた。我々はドイツにおけるシュプランガー研究の推移と彼の特殊ドイツ的な傾向の把握から、もはや彼に一般教育学を求めることはできなくなっている。しかし、価値から自由になり得ない一定の立場からだけ学問を認めることは、まさにシュプランガーの二の轍を踏むことになる。学問の価値中立が、より正確には教育学の普遍妥当性が存在しはするが、到達不可能な明証として認知され、その上で価値中立を否定することなく、これを求めて研究を進めることが、教育学のあり得る可能性であろう。我々はかつてのディルタイの問い、しかし彼とは異質な次元での「一般教育学は可能か」という問いの前に立っている。

Säkunderquellen SPRANGERS.

Batz/Schraut2007: Batz, Salwa/ Schraut, Alban: „Von der Mystik des Diesseits“—eine bisher unveröffentlichte Schrift Eduard Sprangers. In: Mitteilungsblatt des Förderkreises Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung e. V., 2007, S.11-22.

Benner1973: Benner, Dietrich: Hauptströmungen der Erziehungswissenschaft. Eine Systematik traditioneller und moderner Theorie. Weinheim: Deutscher Studien, [1.Aufl. 1973], 3. verbesserte Aufl., 1991.

Blochmann1969: Blochmann, Elisabeth: Hermann Nohl in der pädagogischer Bewegung seiner Zeit. Göttingen; Vandenhoeck & Ruprecht. 1969.

Bollnow1983: Bollnow, Otto Friedrich: Eduard Spranger zum hundertsten Geburtstag. In: Eisermann/ Meyer/ Röhrs1983. S.15-42.

Bollnow1987: Bollnow, Otto Friedrich: Otto Friedrich Bollnow im Gespräch mit Klaus Giel. In: Kaufmann, Hans Bernhard.[hrsg.]: Kontinuität und Traditionsbrüche in der Pädagogik. Münster, 1987, S.24-36.

Bollnowhttp: Bollnow, Otto Friedrich: Hermann Nohl und Eduard Spranger. Zwei Gestalten der geisteswissenschaftlichen Pädagogik in Deutschland[ca. 1980er]. In: <http://www.otto-friedrich-bollnow.de/doc/NohlSpranger.pdf>.

Copei1930: Copei, Friedrich: Der fruchtbare Moment im Bildungsprozeß. Leipzig: Quelle & Meyer, 1930.

Eisermann/ Meyer/ Röhrs1983: Eisermann, Walter/ Meyer, Hermann J./ Röhrs, Hermann[hrsg.]: Maßstäbe. Perspektiven des Denkens von Eduard Spranger. Düsseldorf: Schwann, 1983.

Garz2013: Garz, Detlef: Paradigm lost- Über das (unmeindliche) Ende “der” Geisteswissenschaftliche Pädagogik. In: Gerhardt, V. Kaufmann, C. u.a.[hrsg.]: Politisches Denken. Jahrbuch 2013. Berlin: Duncker & Humblot, 2013, S.13-28.

Heiland1988: Heiland, Helmut: Eduard Spranger. Zur fünfundzwanzigsten Wiederkehr seines Todesjahres. In: Erziehen Heute. Jahrgang 8 1988. S.31-35.

Himmelstein1990: Himmelstein, Kalus: “Wäre ich jung, wäre ich Nationalsozialist...”. Anmerkungen zu Eduard Sprangers Verhältnis zum deutschen Faschismus. In: Keim, Wolfgang[hrsg.]: Erziehungswissenschaft und Nationalsozialismus. Marburg, 1990, S.39-59.

Himmelstein1994: Himmelstein, Klaus: Zur Konstruktion des Geschlechtsverhältnisses in der pädagogischen Theorie Eduard Sprangers In: Jahrbuch für Pädagogik.

Frankfurt a. M. u.a. 1994, S.225-246.

Himmelstein1996a: Himmelstein, Klaus: Eduard Sprangers Bildungsideal der "Deutschheit". Ein Beitrag zur Kontingenzbewältigung in der modernen Gesellschaft? In: Jahrbuch für Pädagogik. Frankfurt a.M. u.a. 1996, S.176-196.

Himmelstein1996b: Himmelstein, Klaus: Eduard Sprangers Bildungsideal auf den Trümmern von 1945. In: Die Schärfung des Blicks. Frankfurt a.M./ New York, 1996, S.61-75.

Himmelstein1998: Himmelstein, Klaus: "Diese reiche Bewegung in gesunde Bahnen lenken". Zur Auseinandersetzung mit der Reformpädagogik. In: Keim, Wolfgang/ Weber, Norbert H.[hrsg.]: Reformpädagogik in Berlin. Tradition und Wiederentdeckung. Frankfurt a.M. u.a. 1998, S.257-289.

Himmelstein2000: Himmelstein, Klaus: Käte Silber. Leben um Plural. In: Dust, Martin/ Sturm, Christoph/ Weiss, Edgar[hrsg.]: Pädagogik wider das Vergessen. Kiel/ Köln, 2000, S.123-137.

Himmelstein2001: Himmelstein, Klaus: Die Konstruktion des Deutschen gegen das Jüdische im Diskurs Eduard Sprangers. In: Meyer-Willner2001, S.53-72.

Himmelstein2003: Himmelstein, Klaus: "Eduard Spranger und der Nationalsozialismus". Zur Auseinandersetzung Fritz Hellings mit Eduard Spranger. In: Dietz, Burkhard[hrsg.]: Fritz Helling, Auflärer und "politischer Pädagog" im 20. Jahrhundert. Frankfurt a.M. u.a. 2003, S.303-315.

Himmelstein2004: Himmelstein, Klaus: Eduard Spranger im Nationalsozialismus. In: Sacher/ Schraut2004, S.105-120, u. S.261ff..

Himmelstein2006: Himmelstein, Klaus: "Absander meines Volkes und meiner Regierung". Eduard Spranger in Japan. In: Horn, Klaus-Peter/ Ogasawara Michio/ Masaki Sakakoshi/ Tenorth, Heinz-Elmar/ Jun Yamana/ Zimmer, Hasko[hrsg.]: Pädagogik im Militarismus und Nationalsozialismus. Japan und Deutschland im Vergleich. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2006, S.99-118.

Himmelstein2011: Himmelstein, Klaus: Kaiser, Kanzel und Parade. Zur politischen Sozialisation Eduard Sprangers. In: Weiss, Edgar[hrsg.]: Pädagogische Perspektiven in kritischer Tradition. Frankfurt a.M. u.a. 2011, S.23-48.

Himmelstein2013: Himmelstein, Klaus: Das Konzept Deutschheit. Studien über Eduard Spranger. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013.

Huschke-Rhein1979: Huschke-Rhein, Bernhard: Das Wissenschaftsverständnis in der geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Dilthey- Litt- Nohl- Spranger. Stuttgart: Klett Cotta, 1979.

Klafki/ Dahmer1968: Klafki, Wolfgang/ Ilse[hrsg.]: Geisteswissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche- Erich Weniger. Weinheim: Beltz, 1968.

Klafki1982: Klafki, Wolfgang: Die Pädagogik Theodor Litts. Königstein/Ts.: Scriptor, 1982.

Kraus2013: Kraus, Hans-Christof: Preußen aus der Distanz. Eduard Spranger und der "Berliner Geist".

In: Gerhardt, V. u.a.[hrsg.]: Politisches Denken Jahrbuch 2013. S.47-64.

Laugstien1989: Laugstien, Thomas: Die protestantische Ethik und der "Geist von Potsdam". In: Haug, Wolfgang Fritz[hrsg.]: Deutsche Philosophen 1933. Hamburg: Argument, 1989, S.29-68.

Löffelholz1977: Löffelholz, Michael: Philosophie, Politik, Pädagogik im Frühwerk Eduard Sprangers 1900-1918. Hamburg: Helmut Buske, 1977.

Matthes2004: Matthes, Eva: Die Spranger -Rezeption in der (west-) deutschen Pädagogik seit 1964. In: Sacher/ Schraut 2004. S.227-243.

Mehring2013: Mehring, Reinherd: Spranger und philosophische Pädagogik. In: Politisches Denken. Jahrbuch 2013. S.65-75.

Meyer-Willner1986: Meyer-Willner, Gerhard: Eduard Spranger und die Lehrerbildung. Die notwendige Revision eines Mythos. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 1986.

Meyer-Willner2001: Meyer-Willner, Gerhard[hrsg.]: Eduard Spranger. Aspekte seines Werks aus heutiger Sicht. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2001.

Ortmeyer2008: Ortmeyer, Benjamin: Eduard Spranger und die NS-Zeit. Forschungsbericht. Frankfurter Beiträge zur Erziehungswissenschaft. Frankfurt am Main: Johann Wolfgang Goethe-Universität, 2008.

Paffrath1971: Paffrath, Fritz Haltmut: Eduard Spranger und die Volksschule. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 1971.

Priem2000: Priem, Karin: Bildung im Dialog. Eduard Sprangers Korrespondenz mit Frauen und sein Profil als Wissenschaftler(1903-1924). Köln/ Weimar/ Wien: , 2000.

Sacher2001: Sacher, Werner: Der junge Spranger als Erziehungs- Schulpraktiker. In: Meyer-Willner2001. S.30-52.

Sacher1999: Sacher, Werner: Eduard Spranger und Käthe Hatlich. Eine biographische Skizze. In: Jahrbuch für historische Bildungsforschung. Band 5, Bad Heilbrunn: Julius Klinkhardt, 1999, S.247-266.

Sacher/ Martisan2002: Sacher, Werner/ Martinsen, Sylvia Chrs.g.J: Eduard Spranger und Käthe Hadlich. Eine Auswahl aus den Briefen der Jahre 1903-1960. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2002.

Sacher/ Schraut2004: Sacher, Werner/ Schraut, Alban[hrsg.]: Volkserzieher in dürftiger Zeit. Studien über Leben und Wirken Eduard Sprangers. Frankfurt a.M. u.a.: Peter Lang, 2004.

Schraut2007: Schraut, Alban: Biografische Studien zu Eduard Spranger. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2007.

Siemsen1926a: Siemsen, Anna: Beruf und Erziehung. Berlin: Laub'sche, Rotes Archiv, 1926.

Siemsen1926b: Siemsen, Anna: Erziehung als gesellschaftliche Erscheinung. In: Siemsen1926a, S.9-20.

Tashiro1999: Tashiro Takahiro: Affinität und Distanz. In: Paedagogische Rundschau. Jahrgang 53, 1999, S.43-58.

Tenorth1986: Tenorth, Heinz-Elmar: Transformation der Pädagogik. In: Zeitschrift für Pädagogik. Jahrgang 20. 1986, S.21-85.

Tenorth2001: Tenorth, Heinz-Elmar: Sprangers Erziehungsphilosophie- ihre Bedeutung für Pädagogik und Erziehungswissenschaft. In: Meyer-Willner, G.[hrsg.]: Eduard Spranger. Aspekte seines Werks aus heutiger Sicht. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2001. S.16-29.

Wehrmann1982: Wehrmann, Volker[zusammengest. u. Bearb.]: Friedrich Copei 1902-1945. Dokumente seiner Forschungen aus Pädagogik, Schule und Landeskunde. Detmold: Lippischer Heimatbund, 1982.

Primäre Literatur SPRANGERS.

GS2: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 2[GS2], Heidelberg: Quelle & Meyer, 1973.

GS5: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 5[GS5], Tübingen: Max Niemeyer, 1969.

GS8: Meyer, Hermann Josef[hrsg.]: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 8. Staat. Recht und Politik. Tübingen: Max Niemeyer, 1970.

GS10: Sachs, Walter[hrsg.]: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 10. Hochschule und Gesellschaft. Heidelberg: Quelle & Meyer, 1973.

N001: Spranger: Einleitung. In: Spranger, Eduard[hrsg.]: Hutten: Briefe an Luther. Leipzig: Wöpke, 1903. XXX.

N003: Spranger: Humanität In: Ethische Kultur.. Jahrgang 12. 1904. S.1-3.

N004: Spranger: Phantasie. In: Die Propyläen. Jahrgang 1. 1904. S.697-699.

N005: Spranger: Der erkenntnistheoretischen und psychologischen Grundlagen der Geschichtswissenschaft. Göttingen 1905: Dietrich. [Abschnitt I. Erkenntnistheorie und Geschichte.] [s. N006].

N006: Spranger: Die Grundlagen der Geschichtswissenschaft. Eine erkenntnistheoretisch-psychologische Untersuchung. Berlin: Reuther und Reichard, 1905.

N009: Spranger: Zur ästhetischen Weltanschauung. In: Deutschland. Monatschrift für die gesamte Kultur. Band 6. 1905. S.35-44.

N038: Spranger: Beethoven und die Musik als Weltanschauungsausdruck. Leipzig: Wiegandt, 1909.

N100: Spranger: Das humanistische und das politische Bildungsideal im heutigen Deutschland. Berlin: Mittler, 1916, [Deutsche Abende im Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht. Vortrag 6.], S.1-36.

N352: Spranger: Umriss der philosophischen Pädagogik. In: GS2, S.7-61.

- Spranger1939: Spranger, Eduard: Volksmoral und persönliche Sittlichkeit. In: GS5, S.247-264.
- Spranger1948: Spranger, Eduard: Philosophische Grundlegung der Pädagogik[Tübinger Vorlesung]. In: GS2, S.62-140.
- N698: Spranger: Rede über die Hausmusik. Kassel/ Basel: Bärenreiter, 1955.
- o.N1933: Politik aus Glauben. In: Staats- Arzeiger für Württemberg. Jahrgang 1932, Nr.263, S.2.
- o.N1948: Philosophische Grundlegung der Pädagogik. In: GS2, S.62-140.
- Spranger1961: Spranger, Eduard: Kurze Selbstdarstellungen. In: Bähr, H. Walter/ Wenke, Hans[hrgs.]: Eduard Spranger. Sein Werk und sein Leben. Heidelberg: Quelle & Meyer, 1964, S.13-21.
- SSBriefe: Carl-Schmitt-Gesellschaft [hvsq.]: Schmittiana. Neue Folge, Band II, Berlin: Dunker & Humblot, 2014, S.130-152.
- Sacher/Martinsen2002: Sacher, Werner/ Martinsen, Sylvia[hrgs.]: Eduard Spranger und Käthe Hadlich. Eine Auswahl aus den Briefen der Jahre 1903 bis 1960. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2002.

Verwendete Literatur.

- 山元 1999a: 山元有一, 「若きシュプランガー (I) / 1900年以前のシュプランガーに関する歴史的比較考察」(『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第49号, 1999年, 21-35頁).
- 山元 1999b: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと教育アカデミー (前編)」(『松阪大学女子短期大学部論叢』第37号, 1999年, 33-46頁).
- 山元 2000: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーとコイデル全国学校法案」(『松阪大学短期大学部論叢』第38号, 2000年, 20-33頁).
- 山元 2001a: 「初等教育に関する若きシュプランガーとパウルゼン」(『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第53号, 2001年, 1-18頁).
- 山元 2001b: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと教育アカデミー (承前)」(『松阪大学短期大学部論叢』第39号, 2011年, 1-17頁).
- 山元 2001c: 「大学教育改革を巡る歴史と教訓/ 20世紀前半のドイツにおける高等教育学運動を参考にして」(中井, 宇田, 片山, 山元『地域に生きる大学』, 和泉書院, 2001年, 137-182頁).
- 山元 2002: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと女子教育」(『松阪大学短期大学部論叢』第40号, 2002年, 8-24頁).
- 山元 2003: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと教育アカデミー (承前)」(『松阪大学短期大学部論叢』第41号, 2003年, 28-49頁).
- 山元訳 2004: 「Ed. シュプランガー『1920年7月の全国学校会議における私の関与』」(『松阪大学短期大学部論叢』第42号, 2004年, 40-59頁).
- 山元 2006: 山元有一「カール・ハインリヒ・ベッカーとエドゥアルト・シュプランガー」(『鹿児島女子短期大学紀要』第41号, 2006年, 213-240頁).
- 山元 2007: 山元有一「フリードリヒ・コーパイ (I) / 『教育過程における爽り多き瞬間』とその意義」(『鹿児島女子短期大学紀要』第42号, 2007年, 215-242頁).
- 山元 2008: 山元有一「フリードリヒ・コーパイ (II-1) / コーパイ教育学の可能性について」(『鹿児島女子短期大学紀要』第43号, 2008年, 237-254頁).
- 山元 2009a: 山元有一「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに関する若きシュプランガー」(『鹿児島女子短期大学紀要』第44号, 2009年, 189-208頁).
- 山元 2009b: 山元有一「想像力に関する若きシュプランガー」(『ディルタイ研究』第20号, 2009年, 172-190頁).
- 山元 2010: 山元有一「フリードリヒ・コーパイ (II-2) / コーパイ教育学の可能性について」(『鹿児島女子短期大学紀要』第45号, 2010年, 131-145頁).
- 山元 2011: 「若きシュプランガーと教育学」(『鹿児島女子短期大学紀要』第46号, 2011年, 205-219頁).
- 山元 2012: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと音楽 (その1)」(『鹿児島女子短期大学紀要』第47号, 2012年, 187-203頁).
- 山元 2013: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと音楽 (その2)」(『鹿児島女子短期大学紀要』第48号, 2013年, 163-178頁).
- 山元 2014: 山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと職業教育 (その1)」(『鹿児島女子短期大学紀要』第49号, 2014年, 129-139頁).
- Althusser 邦訳: Althusser, Louis: Pour Marx. La Decouverte: Maspero, 1965. (ルイ・アルチュセール『マルクスのために』, 河野・田村・西川訳, 平凡社ライブラリー61, 1994年).

(2014年12月3日 受理)